

文化情報誌

たわわ

「たわわ」というタイトルには「小さな情報がたくさん集まって多くの実を結ぶように」という期待が込められています。

2026 No.129

油彩画家 原 良介



令和7年に平塚市美術館で開催された企画展「原良介 サギ子とフナ子 光のそばで」が好評を博した平塚市出身の油彩画家・原良介さんにお話を伺いました。

— 昨年の地元平塚での個展では、どのような思いで制作に取り組みましたのですか。

6歳から30歳ぐらいまで平塚に住んでいました。平塚市美術館での企画展は、自分が50歳になる年の開催ということもあり、育った場所を舞台にしたい。もともと「川」を主体にした作品を作りたい思いもあったので、馴染みのある金目川を描くことにしました。

— サギ子とフナ子が誕生したきっかけは何ですか。

川だけだと当たり前すぎる風景なので、もう少しキャッチーな取っかかりが欲しくて、平塚市の市民の鳥シラサギと、川に住む身近な魚のフナを主人公に選びました。それから、魚も森の中を泳いでいるほうが楽しいかなと思って。絵を見て自由に想像する起点は、面白くて取っかかりの幅が広い方がいい、という思いもありました。



「フナ子」作品（平塚市美術館蔵）

自分は、身近に親しんでいる自然と、人間との関わり方について描いていますが、強く影響を受けたのが、クロード・レヴィ＝ストロースの著作でした。感銘を受けた「人間も自然（動植物）のネットワークの一部である」という思想を、絵の中で人間と自然を合体させれば、イメージで直感的に伝えやすいと考えたんです。これが、サギ子とフナ子が誕生したきっかけです。

— 作品を制作するうえで意識していることはありますか。

決まった時間に自然光の下で描くことです。

妻がフルタイムで働いているので、午後は家事育児にかかりきりになるんです。だから、制作は午前中の3時間ぐらいに集中して行っています。

見える範囲のものを、同じ時間に見て、淡々と描くことを繰り返していると、鳥の種類が変わったり、虫の音が変わったり、そんな些細な変化にすごく敏感になるんです。だから、このペースは崩さないよう徹底しています。

— 原さんの作品は、当たり前の風景が描かれているけれど、どこか不思議で、日常とは違う感じがします。

日々、観察している自分の周辺にある当たり前のものと、頭の中で妄想しているものは全然違う。でも、毎日、淡々と目の前のものを描いていると、ふと、妄想とありふ

れた日常の風景が重なる瞬間があるんです。だから、サギ子のようなギャップのあるモチーフも抵抗なく、取り入れることができたんです。

— 絵の道に進むきっかけや、エピソードを教えてください。

誘われて、小学1年生から平塚市内の水彩画教室に通い始め、そこで絵を描く喜びと楽しさを経験したことが、今の道に進むきっかけになっています。



「サギ子」作品（原さん提供）

うまくいったらほぼそのまま油絵具で描く。このプロセスは、とても大事にしています。

自分の作品は油絵だけど水彩画のような薄描きで、絵の具を重ねない一層一塗です。油絵具も水彩絵具と同じように、最初の一層目の発色が綺麗なんです。また、筆跡から、どういう風に筆を使って描いたかがわかるので、あえて筆跡と発色を残す形で描いて、絵具を筆にのせて紙に色を置いて形にしていって行程そのものを見せるように意識しています。これは小学生のころの水彩画の感触そのままです。子どものころの体験が、今の自分の技術的な核になっているんです。

— 作品を通して、伝えたいメッセージは何でしょうか。

絵は、上手くなきゃいけない綺麗じゃなきゃいけない、って思いがちですが、絵の良さはそれだけではない。発想と見方次第でとても面白いものになるんだ、ということ。そして、絵の具を紙にのせて、それが形になっていく過程は絵を描く喜びそのもので、それを見せることも絵の良さなんだよ、ということが、特に子どもたちに伝えられていたらいいなと思います。

【プロフィール】 ^{はら}原 ^{りょうすけ}良介

油彩画家。

1975年平塚市生まれ。2000年多摩美術大学美術学部絵画科卒業、2002年多摩美術大学大学院美術研究科修了。大学院在学中の2001年、第2回トーキョーワンダーウォール展で大賞受賞。2009年、東京オペラシティアートギャラリーで「projectN 36 原良介」開催。2012年茅ヶ崎市美術館で「原良介絵画への小径」開催。2025年平塚市美術館で「サギ子とフナ子 光のそばで」開催。その他個展などで活動多数。



「サギ子」のスケッチ画（原さん提供）

当時教室で使っていたものと同じスケッチブックを、今でも意識的に使っています。このスケッチブックに、頭に浮かんだイメージや見たものを描きとめて、ここで

みのる 木谷實・星のプラザ通信⑤

「木谷實・星のプラザの企画展示」

～木谷實と名人引退碁～

「木谷實・星のプラザ」(ひらしん平塚文化芸術ホール2階)では、4カ月ごとに内容を入れ替える「企画展示」を行っています。

今回は、木谷が挑戦者として対局した名人引退碁をテーマに展示中の「木谷實と名人引退碁」の一部を紹介します。



● 名人引退碁「時間付」、「最終譜」 ●

昭和13年6月に開始された本因坊秀哉名人(1874～1940)の引退碁は、半年もの期間を費やして対局されました。

「時間付」は一手一手の手順に掛かった時間を書き留めたもので、名人引退碁では各40時間という長い持ち時間でした。「最終譜」には12月4日、伊東「暖香園」で終局し、木谷の五目勝ちであったことなどが記されています。



● 名人引退碁「封じ手」封筒(複製) ●

昭和13年に初めて採用された「封じ手」は打ち掛け(勝負を一時中断する)となった際、次の手を書いた碁罫紙を封筒へ入れ、翌朝の開始時間まで保管するものです。展示する名人引退碁の「封じ手」封筒(複製)からは、対局月時や1日に進んだ手数、対局場などが確認できます。



● 名人引退碁観戦記(切り抜き) ●

(大阪毎日新聞(観戦記者:川端康成、解説:呉清源))

川端康成は、名人引退碁の観戦記を毎日新聞に連載していました。企画展では連載の切り抜きを展示します。

連載から20年ほど後、川端は観戦記をもとに小説『名人』を完成させます。



● 川端康成著『名人』 ●

この小説は、木谷と川端を除くすべての登場人物が実名で表現され、引退碁を名人の視点から描いています。

展示では、川端が木谷へ贈ったサイン入りの献本を御覧いただけます。



● 企画展示情報 ●

企画内容:「木谷實と名人引退碁」

開催期間: 令和8年10月1日(木)～令和9年1月29日(金)

国際交流員(CIR)ヴィクトリヤさんのお仕事 ～国際交流員の派遣～

平塚市の国際交流員として活躍されている、リトアニア出身のゲセヴィチュ・ヴィクトリヤさん。

リトアニア共和国やカウナス市との交流を推進するためのさまざまな仕事をしています。今回は、8月に大野子どもの家で行われた派遣事業に同行しました。



クイズに答える子どもたち

第1部は、「カウナスってどんな街?リトアニアってどんな国?」をテーマに、リトアニアと平塚の交流や、姉妹都市のカウナス市について、集まった18名の小学生にお話をしました。

ヴィクトリヤさんは、地図や写真、動画を使って、リトアニアやカウナス市の地理、文化、生活について、わかりやすく説明しました。お話の後にはクイズを出題。リトアニアやカウナス市について理解を深めました。

第2部は、リトアニアの伝統工芸品「ソダス」作りに取り組みました。

「ソダス」は、家族が幸せに暮らせるように、家の

中に平和が訪れるようにと願って食卓の上などに飾る、藁でできた工芸品です。今回は藁の代わりにストローを使って、みんなでソダス作りにチャレンジ!ヴィクトリヤさんも、小学生たちの工作のお手伝いをしました。平面から立体を作ることに少し苦戦しつつも、みんな最後まで丁寧に作っていました。



伝統工芸品「ソダス」

国際交流員の派遣は、リトアニアやカウナス市の文化や生活の紹介などを、希望のあった市内の教育機関や施設、団体を中心に行っています。ご希望があれば文化・交流課交流親善担当にご相談ください。



ソダス作りを手伝うヴィクトリヤさん

ひらしん平塚文化芸術ホール 主催事業レポート Vol.11

ひらしん平塚文化芸術ホールで実施している、さまざまなジャンルの事業の様子をお届けする主催事業レポート。第11弾の今回は、7月26日(日)に行われた「MUSICエンターテインメントシリーズ」vol.10、「coba Renaissance (コバルネッサンス)」を紹介します。

日本を代表するアコーディオニストのcoba(コバ)さんを中心とした、十亀正司さん(クラリネット)、高橋香織さん(ヴァイオリン)、皆神陽太さん(ファゴット)、甲藤さちさん(フルート)、バカボン鈴木さん(コントラバス)、仙波清彦さん(ドラム、パーカッション)の七重奏という、一風変わった編成で、アンコールを含め14曲を演奏しました。



曲は全てオリジナルで、異国を散歩しているような軽やかな「プシュケ」から、テレビ番組でおなじみの「過ぎ去りし永遠の日々」、はたまたハンバーガーの目線に立って作られたという、実験的なサウンドの「ハンバーガーの言い分」など、バラエティに富んだ楽曲が披露されました。曲の合間には気の置けない仲間同士の息の合ったトークもあり、終演まで観客を魅了しました。coba(コバ)さんの変幻自在かつ情熱溢れる演奏で、アコーディオンという楽器の魅力に改めて気づかされました。終演後の会場では、「来てよかった!」「あの曲テレビで聞いたことあった!」「アコーディオンっておももしろい!」という声が聞こえてきました。

ひらしん平塚文化芸術ホールでは、今後も「MUSICエンターテインメントシリーズ」として、様々なアーティストを招いてコンサートを開催していきます。ひらしん平塚文化芸術ホールのホームページや平塚市の公式LINE等で情報発信しているので、是非チェックしてみてください!



平塚市文化振興基金に御協力を

平塚市文化振興基金は、市民文化の振興を図るために活用されています。基金に御協力くださる方は、平塚市文化・交流課までご一報ください。

■平塚市文化振興基金にご寄付くださった方

【令和8年(2026年)6月1日から
令和8年(2026年)9月30日まで】

●令和8年(2026年)7月14日
株式会社JR横浜湘南シティクリエイト

※敬称略



発行 平塚市文化・交流課

〒254-8686 平塚市浅間町9-1

電話 0463-32-2235

FAX 0463-21-9756

E-mail: bunkoh@city.hiratsuka.kanagawa.jp

令和8年(2026年)10月15日発行



右の2次元コードより文化情報誌「たわわ」へアクセスできます▶▶